

報告番号 甲 乙 第 号

種村和史君 博士学位請求論文 審査報告

論文題目：詩経解釋學の繼承と變容—北宋詩経學を中心に据えて—

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学附属研究所斯道文庫 教授

博士（文学）

同大学院文学研究科委員

高橋 智

副査 慶應義塾大学文学部 教授

博士（文学）

同大学院文学研究科委員

佐藤道生

副査 早稲田大学教育・総合科学学術院 教授

博士（文学）

内山精也

副査 北京大学中国古文献研究中心 研究員

博士

顧 永新

論文要旨

本論は、中国古代の韻文『詩経』の解釈をめぐる、儒学の経典という性格と最古の詩文という性格が歴史上どのように受け止められ、発展していったのか、という中国経学史・文学史の重要な項目について、北宋時代の学者の解釈を中心に分析考証したものである。北宋『詩経』学が漢・唐の訓詁学を受け継ぎ南宋時代、そして清朝考証学へと影響を与えていく現象を、注釈の厳密な精読によって解明していく。北宋『詩経』学の論理と実相を個々の詩編を例に取って組み立ててゆく論考で、従来になかった新たな観点を多く含み、この方面の我が国最初の論著といつてよい。

本論文の構成は以下の通りである。

はじめに 本研究の概要

第Ⅰ部 歴代詩経学の俯瞰

第一章 イナゴはどうして嫉妬しないのか？—詩経解釈学史点描

第二章 妃は夫のために賢者を求めるか？

第Ⅱ部 北宋詩経学の創始と展開

第三章	欧陽脩『詩本義』の揺籃としての『毛詩正義』
第四章	『詩本義』に見られる欧陽脩の比喻説—伝箋正義との比較という視座で—
第五章	詩の構造的な理解と「詩人の視点」—王安石『詩經新義』の解釈理念と方法—
第六章	蘇軾『詩集伝』と欧陽脩『詩本義』との関係—穩やかさの内実 その一 —
第七章	蘇軾『詩集伝』と欧陽脩『詩本義』との関係—穩やかさの内実 その二 —
第八章	小序に対する蘇軾の認識—穩やかさの内実 その三 —
第九章	漢唐の詩經学に対する蘇軾の認識—穩やかさの内実 その四 —
第十章	深読みの手法—程頤の詩經解釈の志向性とその宋代詩經学史における位置—
第Ⅲ部	解釋のレトリック
第十一章	それは本当にあったことか？ —詩經解釋学史における歴史主義的解釋の諸相—
第十二章	一般論として… —歴史主義的解釋からの脱却に関わる方法的概念について—
第十三章	いかにして詩を作り事と捉えるか？ —『毛詩正義』に見られる仮構認識と宋代におけるその発展—
第十四章	詩を道德の鑑とする者 —陳古刺今説と淫詩説から見た詩經学の認識の変化と発展—
第十五章	詩人のまなざし、詩人へのまなざし —詩經における詩中の語り手と作者との関係についての認識の変化—
第十六章	作者の意図から国史と孔子の解説へ —嚴粲詩經解釋における小序尊重の意義—
第Ⅳ部	儒教倫理と解釋
第十七章	国を捨て新天地をめざすのは不義か？ —詩經解釋に込められた国家への帰属意識の変遷—
第十八章	詩によって過去の君主を刺ることは許されるか？ —『毛詩正義』追刺説の考察—
第十九章	なぜ過去の君主を刺った詩と解釋してはならないか？ —宋代の学者の追刺説批判—
第Ⅴ部	宋代詩經学の清朝詩經学に対する影響
第二〇章	訓詁を綴るもの—陳奂『詩毛詩伝疏』に見られる欧陽脩『詩本義』の影響—
	まとめ
	論文初出一覧
	参考文献
	論文各章の概要

第Ⅰ部【歴代詩經学の俯瞰】

○第一章 第二章 『詩経』解釈学史点描

ここで筆者は『詩経』解釈学の問題提起をする。周南「蟋蟀（しゅうし）」の解釈をめぐる、蟋蟀、すなわちイナゴを詠んだ詩において、周の国の創始者文王の妃が子孫をいっばいに増やすことを歌っているという意味を、漢唐の学者がイナゴは嫉妬しないから特定のつがいだけでなく子孫をなすことができる、とする解釈に対し、宋時代の学者がイナゴはただの比喻であると反論する立場を検討して、宋学の解釈史研究の起点とした。第二章では、同じく周南「卷耳」の詩をめぐる、漢・唐・宋の解釈の立脚する思索の観点について、道徳性・文学性の問題起点を提示した。

第Ⅱ部【北宋詩経学の創始と展開】

○第三章・第四章 欧陽脩『詩本義』と毛『伝』鄭『箋』孔『正義』

欧陽脩（1007～1072）『詩本義』が孔穎達（574～648）の『毛詩正義』をも参照していながら批判的ではあることの事実を証明し、これまでの漢代『詩経』学と宋代『詩経』学との関係に唐代『詩経』学を組み入れる必要があることを論点とした。経学と文学のあり方をも問題視する。従って『詩本義』は、漢・唐から南宋の朱熹（1130～1200）にいたる流れの空隙を埋めるものと規定した。

○第五章 王安石『詩経新義』の解釈理念と方法

王安石（1021～1086）『詩経新義』は独特で政治的であり、漢代の『詩序』を批判的に見る宋代『詩経』学と一線を画し、『詩序』を容れ、詩間に推移を持たせて解釈する。『詩経』の複雑な構造を見いだす解釈。「興」は単なる比喻ではなく、詩人の観点を踏まえた事実の関係性であり、ここに毛亨『伝』・鄭玄（127～200）『箋』・孔穎達『正義』との違いがあることを明らかにした。

○第六章 蘇轍『詩集伝』と欧陽脩『詩本義』

蘇轍（1039～1112）は蘇軾（1036～1101）の弟で、『詩経』全体を俯瞰した柔軟な解釈をする。欧陽脩の説をとりいれながらも個別の詩の位相を考証する欧陽脩の立場とは違い、詩全体のつながりを重視する立場を取り、漢・唐訓詁学が基づいた『詩経』孔子刪詩説を取り入れていたと分析した。

○第七章 蘇轍『詩集伝』と王安石『詩経新義』

蘇轍『詩集伝』と王安石『新義』との関係、蘇轍は旧法党、王安石は新法党、司馬光（1019～1086）は『新義』に対し猛獣を見るような扱いをしていたが、蘇轍はそうではない。実は『新義』に由来するものも見られる柔軟性を持っていると指摘した。

○第八章 『小序』に対する蘇轍の認識

蘇轍『詩集伝』が、漢代『小序』の一部を削り、漢・唐訓詁学と一線を画し、朱熹らの新たな解釈を生み出したとする従来の研究に一步前進し、蘇轍と漢・唐訓詁学との関係を再検証した。『小序』の第二句以降を削除してもそれに連なる解釈をしている箇所もある。また、『小序』の後半を削除したのはそれが無価値というのではなく、前半と同等の意義を持つものではなく、前半と後半は離しておくべきだとの考えから、後半を解釈の中に組み入れたの

であると分析する。蘇轍は欧陽脩・王安石を受け継ぎながら、穏やかに変革を遂げて解釈したのだと結論する。

○第九章 漢唐の『詩経』学に対する蘇轍の認識

蘇轍が毛『伝』、孔氏『正義』をどう活用しているか。融通無礙に毛『伝』を取り入れ、『正義』は字義から表現意図まで受容の対象となっている。新鮮さと安定性を備えた『詩経』学を打ち立てた、とする。

○第十章 程頤の『詩経』解釈の志向性と北宋『詩経』学史における位置

程頤（1033～1107）、は程頤の弟、伊川先生。朱熹は深読みし過ぎと批判するがしかし、それは全てではなく朱熹も程頤の解釈を受け継いでいる。程頤は、詩の内容を抽象的な真理として理解し、「詩を以て史に附す」という訓詁学からの脱却をめざし、字句の特殊な解釈・詩編の構造に関心を持つこともあわせその特徴であると分析。また、漸層法を使うのも王安石と似通っていることを立証する。

第Ⅲ部【解釈のレトリック】

○第十一章 『詩経』解釈学史における歴史主義的解釈の諸相

歴史事実を詩に表現した漢・唐の訓詁学から、文学的内実を追求した宋代『詩経』学への発展という定説を解釈の方法論と理念の思惟から検討した。例えば国風・王風「丘中有麻 彼留子嗟 彼留子嗟 将其来施施」の解釈をめぐる、漢・唐・宋と大きな解釈の違いを綿密に解き明かし、「留」一字をとっても漢・唐の一族とする読み、欧・程の動詞とみる（周の莊王が賢人を留めない）読み、即ち「彼の留の子嗟なり」と読むか「彼 君（子）を留めんことを 嗟（ああ）」と読むか。歴史事実とする解釈から抽象化とする解釈へと欧陽脩より変化したことを立証し、その、「文献に無い史実を詩に現すことはない」、という欧陽脩の説を筆者は文献依存の歴史主義と名付けた。孔穎達『正義』は、その事実が失われた書物に根拠があったであろうとする。いずれにしても両者とも史実を根拠とする（虚構を交えても）『詩経』の成り立ちを考え、独立したものとは考えないことを指摘。一方で、宋の嚴粲『詩輯』のように、『詩経』にかかれてあることが、それ史実なのだと主張する者もいて、これを筆者は『詩経』自足型歴史主義と名付けた。また、朱熹はそれらとは全く異なった解釈をした。「留」は動詞であるが、不実男が浮気相手に留められている、と解する。これに清朝の考証学者は反論するのである。こうした解釈の歴史のなかで、現代では『詩経』を文学として鑑賞する姿勢から、民謡の原点として史実云々でなく、ストーリーの面白さを鑑賞すべきだという通念に変わってきている、と指摘する。総じて、宋代の解釈学は、『詩経』の作者が、唱われている事実を実見しているという考え方が横たわっている。これが宋代詩経学の特徴であると分析する。創作過程を重視した考え方は『詩経』解釈学を大きく前進させた結論付けている。

○第十二章 歴史主義的解釈からの脱却に関わる方法的概念について

『詩経』解釈史における文学性の発見は、解釈者個人の資質によるものだけでは連続性がない。そこに連続性の根幹はなかったか、その検討をした。それが欧陽脩の場合、「汎論」

という言葉で表現される。一般論に抽象化する論。例えば、大雅「抑」詩では一般論を説く「汎言」に数章を費やし、厲王を諷るに数章を費やす、というような構成である。そして、その概念が欧陽脩以後の『詩経』解釈者のものに頻繁に現れる。これにより、『詩経』が幾層にも重ねられる構造を認識した上で、『詩経』の六義と言われる「興」の本来の意味を全体のうえで解釈することができるようになった、と分析。

○第十三章 『毛詩正義』に見られる仮構認識と宋代におけるその発展

さて、『正義』に「設言」という表現があるが、虚構であろうとする。とすれば『正義』は宋代『詩経』学に通じるものがあつたと考えられる、として、『正義』が与えた宋代『詩経』学への影響を再度検証している。「仮設」も同様、『正義』では鄭『箋』の解釈に仮構を用いていることがある。賢者が隠栖するのを引き留めたいと願う詩で、隠者は山谷にあると想定するような抽象的な仮定を持ち込む解釈のように、『正義』はすでに宋代の解釈法を準備していたと言える。また、『正義』に於ける仮構認識はこれまでの解釈を合理的に説明するための概念であつたと考えた。しかし、その態度は次代の解釈学に大きな可能性を遺した。北宋にはこの観念は継承されず、南宋にいたって、朱熹の『設言』、そして南宋の嚴粲『詩緝』、輔広『詩童子問』も仮構、すなわち「仮設」、「設言」を用いており、この用法は確立された。「汎言」・「汎論」が『正義』にみられず、欧陽脩によって用いられるようになったのとは異なる展開をみせている。このことより、『正義』は、漢・唐『詩経』学の一部と考えるのは修正すべきである、と主張する。筆者はここで、『詩経』の現している歴史事実と虚構との間で繰り広げられる解釈の意義を大きな問題提起として遺している。

○第十四章 陳古刺今説と淫詩説から見た『詩経』学の認識の変化と発展

「思古詩（説）」と筆者が定義する、理想的古代の事実を唱って現今のありかたを諷刺とする解釈法は、漢・唐『詩経』学によくある手法である。宋代『詩経』学にこの「思古詩」の手法をどうとらえているか、宋代の「淫詩説」と比較するとそこに興味深い共通点があることがわかる、と筆者は言う。要するに『詩』に教訓性を与えるのは誰か、という認識で、作者・編者・読者の関係が横たわってくる『詩経』解釈学の重要な側面である。欧陽脩の、『詩』を極めるには作者の意と聖人の志を究明すべきであるという議論は、文学と経学との両面の性格から読まれる必要があるという理論であると筆者は指摘する。そしてそれは孔子の刪詩説が根拠であろうと筆者は考える。その考えが、やや矛盾をはらみながら、漢・唐から朱熹へとつながる橋となったことを明らかにした。欧陽脩は「思古説」を重んじる。王安石も「思古説」を用いる。蘇轍は『詩序』と内容をうまく整合するように解釈するとき「思古説」を用いる。それに対して朱熹は「思古説」をみとめてはいるが、あまり多用する必要はないとする。しかし、筆者は朱熹の「思古説」と王安石の「思古説」には時間の重層性に共通のものと指摘する。「淫詩説」はあえて不道德を詩に入れることによって読者の道德心を膨らませる解釈法で、朱熹は積極的に用いた。これらの意義は、「思古説」が作者によって道德的意味を附与されるのに対し、「淫詩説」は編者によって道德的意味を附与されるのである。この朱熹の合理性は、欧陽脩が漢・唐の学を受け継ぎながら聖人と詩

人の矛盾をはらんだものを解消発展した朱熹『詩経』学の成果であった、とする。『淫詩説』は注釈者の絶対的地位を読者に与えるもので、理想の読者たる自分を再生産するメディアであると結論する。

○第十五章 『詩経』における詩中の語り手と作者との関係についての認識の変化

従来の研究では、『詩経』は詩人の意図と読者の解釈という見方で論を進めてきている。しかし、『詩経』の注釈者には、実は、もう一つの観点、詩中の語り手と詩人は同じ人か別人かという問題を認識していたと筆者は提起する。朱熹の「淫詩説」は同一人と考える。この問題を『正義』・欧陽脩・朱熹を例に解明し、再検討している。結果的には『正義』では別人としたことにより、より自由にその眼差しを変えることができたが、詩人の意図を孔子が編纂したことにより道徳的なものとなった欧陽脩の見方から、ありのままの眼差しの詩人が朱熹という注釈者によって、読者への道徳心の投げかけというジャンルを形成したとする。いわば文学性の形成を宋代『詩経』学の綿密な検討によって、筆者はその発展の足跡を辿ったのである。

○第十六章 嚴粲『詩経』解釈における『小序』尊重の意義

南宋『詩経』学への発展、嚴粲『詩緝』、朱熹『詩集伝』、呂祖謙『呂氏家塾読詩記』、黄忠慎氏の研究は經学文学理学三点の観点から研究、嚴粲『詩緝』は、文学性を重んじかつ、『詩序』をも尊んだ。この一見矛盾するかのような特徴を筆者は再考した。嚴粲『詩緝』はまず、蘇轍・程頤のように『詩序』の第一句を国史官の手になるとして重んじ、第二句は後世の解説とする。また、第一句には孔子の選択が加わっていると。しかし、この『序』第一句と詩人の説が齟齬する例に筆者は着目し、その分析によって嚴粲『詩緝』の解釈の態度を読み取った。『詩』は当時の人しか知り得ない特殊な要素を含んでいて、それを詩人が言外の意として伝えようとしたものであり、後世のものに理解されるために国史の『詩序』は必要なのだ、とする姿勢を筆者は読み取る。孔子もまさにこの国史の『詩序』あって刪定できたのだという嚴粲の考えを強調する。詩人の個人的な感慨の吐露が孔子の道徳的解釈に変容することで、『詩』の普遍性を獲得しようとした、と嚴粲『詩緝』は考えたと分析する。また、南宋の嚴粲と朱熹の、詩人の意図を重んじながら、『詩序』に対して賛否の分かれるところとなったのは、朱熹が「淫詩説」によって道徳的意義を失いかける矛盾をもう一度『小序』を見直すことによって合理性を見いだそうとしたからであろうと推測する。

第IV部【儒教倫理と解釋】

○第十七章 『詩経』解釈に込められた国家への帰属意識の変遷

歴代の『詩経』注釈に注釈者自身の政治的・道徳的価値観はどのように反映されているだろうか。伝統的な儒教の經典という観点からこの主題に取り組み、倫理と古典解釈の実態を戴維氏の説に基づきながら再検証した。王安石の『新義』は新法正当化の教材であった。新法の保馬法（馬を役所が貸し出す制度）新設に反論があった時、小雅・出車「我出我車 于彼牧矣（彼の牧に我が車を出す）」を兵士が馬車を放牧地に向かわせる、馬は古来放牧されたと解釈して、新設の持論を正当化した。また、王安石の対西夏積極論と蘇軾らの旧法党消

極論はそのまま『詩経』解釈に反映された。そうした解釈は、『詩経』の私の恨みを国の乱れへの憤りという、公のものと解釈していく態度につながる。隠者が入れられず遁世しても君臣の義は守る、これが宋代『詩経』学の解釈であった。諫めて入れられず国を去った臣も同じことである。殉死に至っては宋代『詩経』学では全く認めず、命じた為政者を批判する。主従は一体のものであるという考えがあった。より国家帰属的人間をイメージした『詩経』解釈であると論じる。まさに儒教倫理の発展性を『詩経』解釈に見ることができると筆者は説く。

○第十八章 『毛詩正義』 追刺説の考察

漢・唐の訓詁学に於いて、『詩』のなかで過去の政治の得失を詠んだものとする解釈があるが、孔穎達の『正義』において、どのようになされているか、これまでなされなかった考察を加えた。「追刺」という概念である。つまり、前時代の君主を誹り、現代の誠めとする手法である。ところで、歴史書『国語』に主君の悪事を後世に喧伝することは慎むべきという道德があったことを伝えている。しかし、『正義』では、「追美」と対称的に行われることを正当化しながらも、その用例は極めて少ない。『正義』の追刺は現実の詩人の感情と後世に道德を与える「体」と「用」を論理構造としている点で慎重ではあるが意味ある手法と考えていた。ここから、『正義』の解釈の姿勢を「用」に主眼をおいていたと分析する。これが後の宋代『詩経』学への踏み台になったと、重要な指摘をする。

○第十九章 宋代学者の「追刺説」批判

それでは、宋代『詩経』学が「追刺」をどう捉えているか、その批判を分析した。大雅「抑」の詩について、呂祖謙（1137～1181）、欧陽脩、南宋范処義について考証した。それぞれ、本『詩』は『国語』韋昭注に基づき、周の厲王への追刺であると考えた『正義』の説に反駁、『詩』本来にたちかえるべきであると。また、倫理的に「追刺」への違和感（朱熹）があった。『詩』における「刺」は過ちを改めるために行うのであって、過去の人物への攻撃ではない。宋代以降、『詩』編は過去の君主を批判するものとは解釈されない、と分析。王風「黍離」の「此何人哉（此れ何人ぞや）」の「何人」を、悪政の幽王を指すが名をあげるのも潔しとしないので「何人」と詠んだ、という漢・唐の解釈に対して、南宋・李樗と楊時（龜山 1053～1135）の例を挙げて考証する。「何人」というのは個人を挙げるのを憚ったのだと。また、范処義は詩人の批判は王でなくそれを見ている世人と解釈する。朱熹は「刺」を作詩行為とは認めていなかったようである。つまり『詩序』は読詩の原則を作って作詩の意図を変えてしまったと考えている。南宋嚴粲『詩輯』も同様の考えを持つ。以上のように漢・唐から宋代の解釈を通覧する。唐代『正義』の「刺」もあり得るとする説から宋時代は「刺」はあり得ないという道德的嚴格性を確立していったと分析した。「史をもって詩を解す」から「詩をもって詩を解す」への変換を遂げた、と総括する。しかし、この議論に反すると思われる事例もあり、『詩経』解釈学の発展史を慎重に捉える学問的冷静さを筆者は失わない。更に、清朝、陳奐（1786～1863）の解釈は「追刺」の解釈であり、再びそれはむしかえされる歴史もあるのである。

第V部【宋代詩經学の清朝『詩經』学に対する影響】

○第二十章 陳奐『詩毛詩伝疏』に見られる欧陽脩『詩本義』の影響

清陳奐（1786～1863）の『詩毛詩伝疏』の姿勢は、『詩序』・毛『伝』を守り、漢の解釈を基礎に『詩經』を解釈する、ここに考証と客観的『詩經』の姿という矛盾が生じた、とする。この問題から出発した筆者は、清朝考証学と宋代『詩經』学との影響関係に論を及ぼす。そして、『詩毛詩伝疏』中に欧陽脩『詩本義』に由来したとする説を引用し、陳奐が毛『伝』を尊ぶのに対して欧陽脩は『詩序』・『伝』・『箋』を批判している対立的著作であるが、何故、類似性があるのかを説明している。戴震（1724～1777）以降、清朝考証学では欧陽脩説はよく引かれる。しかし、陳奐は明示的に引用していないが、欧陽脩に基づいた可能性があることは重大な問題点であると指摘する。基づいた根拠を、字義の解釈（考証）・比喻の認識・詩題と詩句の関係・句構造の把握・詩構造の認識に分類して実例を解明している。やはり解釈の発想は欧陽脩から受け継いでいると考えられる、とした。すでに、郭全芝氏は陳奐が朱熹の影響を受けていたことを明らかにした。つきつめれば、『伝』『箋』の疎通という『正義』の名分から脱却し、個別の再検討という欧陽脩の姿勢は、『伝』『箋』を切り離す方法をとった陳奐の方法論に似通っている。これは陳奐の師たる段玉裁（1735～1815）・戴震（1724～1777）に基づく考えである、と指摘する。ここに、欧陽脩が孔穎達『正義』を越えようとして『正義』に影響を受けたこと、陳奐が清学の構築に欧陽脩の影響を受けたこと、漢・唐・宋・清のそれぞれの学問は単純な断絶感をもって括られるものではない、と結論付け、その橋梁となった宋代の『詩經』学の位置を認識する必要性を強調している。

審査要旨

『詩經』は『詩』または『三百篇』とも言われるが、BC11世紀頃からBC6～5世紀にかけて出来た韻文作品で、中国文学最初のものである。と同時に孔子（BC551～BC479）の刪定を経たと言われることから、儒学の經典にもなっている。歴史の役人太史が各地で詠われる詩を採集し、太師と呼ばれる音楽の役人が編集して題名をつけ、後にそれらが、「風」「雅」「頌」という詩体と「賦」「比」「興」の修辞法によって分類整理され、今日見る作品に完成されたもので、漢代の毛亨が伝えたテキスト（『毛詩』）が主流となり、後漢の鄭玄（127～200）がそのテキストに更に注（箋）を加え、唐時代に孔穎達（574～648）の『五經正義』に至ってその地位を確立した。それらを毛『伝』（『故訓伝』）鄭『箋』孔穎達『正義』（疏家）と称し、漢・唐訓詁学とも言われた。

宋になると新説が続々と現れ、『毛詩』の特徴は、『詩經』全体の意義を述べた「大序」と各詩の意義を解説した「小序」であるが、「小序」を廃する欧陽脩（1007～1072）・朱熹（1130～1200）、「小序」を存して新解を展開した呂祖謙（1137～1181）・嚴粲等があった。元・明はこれに準じ、清は乾隆・嘉慶時代以後に文字・訓詁・名物の研究から『詩經』学を確立し、馬瑞辰（1782～1853）・胡承珙・陳奐（1786～1863）等、漢の毛『伝』を重んじて『詩經』の訓詁学を治めた。以上が『詩經』解釈歴史の梗概である。

現代の中国に於ける『詩経』研究史も、各個の注家研究は、諸説を以て成るが、その全体の概要は江湛侯氏、戴維氏等、以上の解釈史を説明するものである。

種村君はこの既定の史観をもう一度丹念な原典の精読によって再検証を志し、先ず、宋代の解釈がどのように漢・唐の解釈と異なるかを、幾つかの詩を例に、明確に整理把握した。こうした実証論理は中国古典文献学の基本構造であり、同君の出発点は極めて正確かつ妥当なものと評価される。

種村君の主たる関心は宋代『詩経』学の位置づけであり、欧陽脩・王安石・蘇轍・程頤といった代表的な学者の解釈の精密な読解を通じて得られた新しい成果は数多い。例えば、宋代『詩経』学は、漢・唐の解釈を攻撃するところから出発しているものの、『詩』に於ける比喻の考え方、「設言」という仮構の認識、「陳古刺今」・「追刺」という詩法など、その解釈原理は既に唐の『正義』に見出すことができ、そこに両者の隔離すべからざる関係を指摘したこと。宋代の『詩経』学は、漢代の古注を否定したのではなく、それを素材化して解釈の源としていること。更に、宋代『詩経』学の系譜とも言うべき位置づけを明らかにしたこと、即ち、蘇轍が欧陽脩を継承するに当たっての立場、また蘇轍の王安石を継承する柔軟な立場と穏やかな変革を遂げた発展、程頤と王安石の共通性などが挙げられ、また、南宋の朱熹が新たな解釈の立場を採った源もまた王安石に求めることができる提議など、従来の、学者間の影響関係の研究に、新たな問題提起を行っている。この姿勢は更なる大きなテーマに発展する糸口を生み、清朝考証学の『詩経』学も欧陽脩の影響を受けた事実を、陳奂のなかに見出し、詳細に検討を加え、『詩経』学史から学術史への広がり視野を入れた。

次に、種村君は、宋代『詩経』学に於ける解釈の理念を検討し、従来の説に新たな観点を加えるに至った。『詩』は事実を詠んだという歴史主義的解釈が漢・唐以来、宋代も受け継がれたが、その事実を誰がどのように詠ったのかまで解釈を発展させたこと、つまり『詩』の作者の大きな関心を持ったことに特性があったことを指摘し、文学性への重大な起点ありとした。その起点は、『詩経』の根本性、つまり誰が詠み、誰が収集整理し、誰が編纂したのかの意識へと進み、『詩』本来の内在的意味と多層的的外在的意味とを意識するに至ったとの指摘はまことに『詩経』の文学的位置づけを明瞭にしている。更にそこに儒学の経典としての『詩経』という道徳性を考慮に入れたとき、その両者が不分明であった漢・唐の解釈と、両者をはっきりと弁別し、併せ呑み込んだ宋代『詩経』学の特徴が浮き彫りになってくる、とする。

南宋に至って、朱熹の解釈はこの問題を極点まで推し進め、『詩』は作者によって為され、読者はその道徳的意味を読み取ることができるとした。種村君はこの観点を欧陽脩以来の北宋『詩経』学の発展の成果であるとしながらも、詩編の解釈を限定してしまう矛盾にも陥りかねないと指摘する。そこで、朱熹を継いだ嚴粲は、漢・唐の重んじた「詩序」を再び取り上げることによって、読者は詩の道徳的メッセージを「詩序」に伺い、作者の自然の感情の発露に焦点を合わせて解釈する方法を取った、と分析し、従来の「朱熹反序・嚴粲尊序」という見方に注意を喚起した。総じて宋代の『詩経』学を「反序」と「尊序」の対立と見る

見方に種村氏は一石を投じ、「詩序」は様々な解釈の立場で利用されながらも、作詩の意図を追求する重要な材料であり続けたことを強調する。ここに、宋代『詩経』学の特徴として、『詩経』解釈の中に文学性を読み取ろうとする明確な傾向の源を見出し、その方法論を抽出することに、本論は成功している。

更に、道徳的解釈は宋代に於いて国家への帰属意識を強調する方向に向かい、「追刺」に見られるように、過去の主君を批判する行為は不道徳とされる解釈もその特徴と指摘する。しかし、種村君は、こうした傾向も詩編の本来の意味と読者に与える現実的効用という多層的解釈を発展させる起因となったと指摘し、宋代の『詩経』学に新たな見方を提示した。

おしなべて、本研究は、宋代『詩経』学の意義を学術史・方法論の二面から追求し、精審な読み下しから明確な観点を導き出している。一部、訓点の統一性を求められる箇所もあるが、その深い解釈上の考察と、漢・唐時代、そして降る清時代に至る『詩経』学全体の俯瞰を整然と論じた重厚な成果は一つ一つに重みがあり、説得力を有していて、非の打ち所のないものといってよい。

また、宋代の文学者が何故、漢・唐の解釈と異なる方法論を必要としたのか、そしてその間を埋める元・明の解釈の展開について、そして清朝の陳奂以外の学者についての更なる分析など、種村君に期待する論点は幾つかを存するが、王安石や朱熹を中心として、その宋代『詩経』学の後世に与えた影響は、今後ますます多岐に亘る研究が為されるであろうその布石として、本研究の論点は、中国経学史・中国文学史に重要な一項を開いたと評価される。

以上により審査員一同は本論文が博士（文学）にふさわしい成果であると判断する。

種村和史君の学識確認をいたしました。

学識確認 慶應義塾大学文学部教授
博士（文学）
同大学院文学研究科委員

関根謙